

医療看護とスピリチュアリティそして日本的「思いやり」倫理 研究会 趣旨

稲垣久和

6月14日からスタートする上記研究会で目指したいことはおよそ以下のようである。

死は身体をも含む身心統一体の将来の“消滅”であり人間個体の最大の「恐怖」と考えられる（ある年齢以上でないと死への恐怖の意識はないが）。つまり個体の「身心の外への突出」の感覚を無くされることは、母の胎内にはらまれて神経細胞が分化した時以来の「生命統一体」としての最大の危機だからだ。この危機への緩和の行為がスピリチュアルケアの基本ではないか？

拙著『実践の公共哲学』220頁にあるICF・四世界モデルとスピリチュアルペインそして村田理論の妥当性を検討したい。村田久行は「時間性・関係性・自律性」からみたスピリチュアルペイン」（『スピリチュアルケアの手引き』6頁）で「死に臨むがん患者にとって、死の意識は漠然とした「死の想念」ではない。志向性が意識の本質を形成しているのである。終末期がん患者の志向性が自己の生の限界と将来の喪失に向けられる時、患者の意識に、世界と他者と自己の存在が無意味なものとして現出する」と述べる。

「志向性」をフッサー尔的に「～についての意識」と取るよりもトマスの「能動的知性」と取る方がよいのではないか。もし後者であれば死は身心統一体の将来の“消滅”であり最大の「恐怖」となる理由が分かる。

その緩和の内容は確かに「他者との関係」なのであるが、その場合、究極においては、他者の心の中に自己が生き続けることか、または超越的実在によって永らく覚えられ続けていることかのどちらかのための支援なのではないか。前者は心理社会的なテーマであり、後者は宗教的テーマとならざるを得ないであろう。したがってスピリチュアルペインを議論する以上、支援者の人格が最大の鍵であると同時に、志向性においてハイデガー的な「世界内存在」は不十分で「世界内超越」と考えるべきではないか？

小西達也「スピリチュアルケアとは、スピリチュアル・クライシスすなわちビリーフ（価値、信念体系、世界観）が現実に対応できなくなっている状態にある人のサポート（同封論文 38頁）。一段深めて、「ビリーフへの信仰を手放す」として、スピリチュアルケアとはスピリチュアリティに目覚めることをサポートする行為（45頁）。ただしスピリチュアリティとは「内在的神性」（スピリット）の性質やたらきを意味する名詞、とある。

スピリチュアルケアにおける親密圏と公共圏の区別はどうか？病院などでの異業種間の協働の場合に出てくる認識論（世界観）の違いはどのように調停されるのか？伊藤高章 ABC conceptual model はABCD conceptual model というようにして spiritual meaning をリアルな（実在する）経験として加えることはどうか？「患者に寄り添う」「患者の主観的な痛みを大切にする」重要性を踏まえつつ、主観を強調する認識論は反実在論に傾きやすいと思われるので、その場合、他者や外部世界のリアリティ（実在性）はどのように担保されるのか？医学という実証的科学と物語りという解釈学的発想の整合性は？

「自己の消滅の恐怖」と「自己の複雑さ」の関係という問題

「自己の消滅」(死)というときの「自己」とは何か。生命統一体としての自己がある階層性をもっていることを考慮する。

1. 脳科学から

・ Jaak Panksepp 理論における情動操作システム階層性

一次的情動(視床下部・脳幹)・・・seeking (探索、欲), lust (貪), care, rage, fear, panic, play

二次的情動(大脳辺縁系)・・・empathy, trust, blame, pride, shame (慚), guilt (愧),

三次的情動(大脳皮質)・・・names of feelings, mentalization, distancing skills, containment (感情の虜となること、煩悩), mindfulness (心の豊かさ、思いやり、慈悲)

2. 西田哲学から

・「自己が自己において自己を見る」(西田幾多郎「私と汝」1932年)という三層の自己論(拙著『宗教と公共哲学』137頁)。

・「自己が自己に於て見ると考へられる時、自己が自己に於て絶対の他を見ると考へられると共に、その絶対の他は即ち自己であるとみふことを意味していなければならない」。

① 私 (I-ness の意識) が「絶対無の場所」において「真の自己」を見る。(十牛図)

② 私が「絶対の他」において「真の自己」を見る。(西田「私と汝」)

③ 私が「PAG」において「真の自己」(SELF)を見る。(SELFはパンクセップ脳理論)

④ 私が「アーヤ識」において「真の自己」(SELF)を見る。(浅野孝雄)

⑤ 私が「イエス・キリスト」において「真の自己」(SELF)を見る。(稲垣)

・ ①「絶対無の場所」とは己事究明の禅のテキスト「十牛図」第8図の「空なる円相」

・ ②西田の自覚の理論(場所的論理)の中で「自己の根拠としての絶対他性」を主題化している。またこれを応用して木村敏は人格の自他同一性において一人称的な自己性のまとまりがあり、これを失うときに統合失調症などの症状があらわれるとしている。

・ ③脳科学において傍中脳水道灰白質(PAG=the periaqueductal gray)という特定の場所は全ての哺乳類に共通する古い領域で、Pankseppはこれを原初的なSELF(Simple Ego-type Life Form=単純な自己タイプの生命形態)の主要な中枢であるとした。

・ ④浅野孝雄は③を仏教の唯識理論とフリーマン・パンクセップ脳科学理論から解釈する。「アーヤ識はPAGに対応し、マナ識は皮質および皮質下の高次の観察者を含む広い意味でのSELFシステムに対応すると考えられる」としている。

・ ⑤「あなたがたの心の内にキリストを住まわせる」(エペソ3:17)。「キリストがあなたがたの心の内に形づくられる」(ガラテヤ4:19)。「キリストがあなたがたの内にいる」(ローマ8:10)。「生きているのはわたしではなく、キリストがわたしの内に生きている」(ガラテヤ2:20)。

・ 「自己の消滅」を克服する道は④⑤においては「絶対の他」が「アーヤ識」(仏法)や「イエス・キリスト」に置き換えられる点において「宇宙の法」「永続する自己」という宗教的(世界4の)リアリティを獲得する。この視点は自己―他者関係(世界3)からも重要。